

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学
所 属 保健医療学部看護学科
名 前 山勢善江
作成日 2023年6月●日

1. 教育の責任

私は保健医療学部看護学科に 21 年度に着任した山勢善江(教授)である。教員経験約 30 年、現在は【資料1】の授業科目を担当している。

これまでの教育経験に基づき、成人看護学に関連した科目を多く担当している。また、22 年度からの新カリキュラムのうち、看護の基盤を構成する科目も多数担当し新カリキュラムの運用に寄与している。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私は、1986 年に看護大学卒業後都内の大学病院等で 9 年間手術室および高度救命救急センターで看護師(スタッフ、主任、係長)として勤務し、その間大学院修士課程で学び、その後は、大学での教育(講師・准教授・教授、教務委員長・学部長)に従事しつつ大学院博士課程で学位を取得した。

実践・教育・研究のテーマは、一貫してクリティカルケアを受ける患者とその家族への看護であり、また前職(日本赤十字九州国際看護大学)での、国際・災害看護を特色としたカリキュラムでの教育経験上、災害急性期看護についても教授してきた。

その中で、私が大切にしていることは、クリティカルな状況という危機状況にある患者の身体・心理・社会的側面について、学部レベルで基本的な知識や技術の基盤となる考え方を理解することにより、あらゆる場の患者や家族の状況理解に応用できると考え教授することである。

2) 理念をもつに至った背景

自分自身の理念(信念や信条)を持つに至った背景には、私自身が受けた教育と臨床での経験がある。

大学での教育では常に、何がこのケアの原理原則か、またそこにはどのような根拠があるかを学生自身が考えられるように教授され、枝葉末節は教えられなかったと記憶している。このため臨床看護師 1 年目では「大卒生は、頭ばかりで手足が動かない」と批判されることもあったが、それは目の前で起こる個々の現象から本質を見出し、その上で具体的ケアを自らが導き出すために必要不可欠な時間的ずれではないかと考えている。このため、私は学生が「すぐにできない」ということにはまったくこだわらない。そのプロセスにおいて何をどのように考えていたかを大切にしておかかっている。

また、学部卒業時には「一度臨床に出て、興味がある分野を見つけたら必ず大学院に戻りたい」と考えていたため、救命救急センターでの経験をj経て修士課程に進学した。私は研究とは業績のためでなく、臨床に還元するためのものだと考えていたため、研究テーマは「クリティカルケア患者の褥瘡発生予測モデルの開発」として、

自力で体動が不能な患者の褥瘡発生にかかわる要因の抽出と、それらの変化、そして何日前には発生予測が可能かについて多変量解析を用いて分析し予測式を開発した。修士終了後は臨床に戻り、この結果を救命センターで活用し褥瘡発生予防に貢献できた。

3. 教育の方法・戦略

上段でも述べた通り、私の教育の理念(信条・信念)は、何がこのケアの原理原則か、またそこにはどのような根拠があるかを学生自身が考えられるように教授することであり、そのためにクリティカルな状況という危機状況にある患者の身体・心理・社会的側面について、学部レベルで基本的な知識や技術の基盤となる考え方を理解できるようにすることである。

そこで、何に基づき、何を目標に、どのような方法で教育しているかを記述する。

1. 生体に侵襲が加わった際、患者にどのような反応が起こるか理解し、看護を考えることができる。**【資料2】**
 - ・生体侵襲理論を用いて、侵害刺激に対する患者の身体的反応について論理的に理解できるように繰り返し教授する。
 - ・2023年度は、「病態学Ⅱ(救命救急)」「成人看護学」「成人看護方法論Ⅰ」「ヘルスアセスメントⅡ」でこの考え方をもとに展開する。
 - ・2024年度の実習においても、この考え方の原則をもとに、看護を導き出すことができるように計画中である。
2. 危機的状況に陥った際、人間がどのような反応を示すかを理解し、看護を考えることができる。**【資料3】**
 - ・危機理論/危機モデルを用いて、ストレスの多い状況での患者や家族の身体・心理状況を理解し、看護を考えることができる。
 - ・2023年度は「成人看護学」「成人看護方法論Ⅰ」「ヘルスアセスメントⅡ」でこの考え方をもとに展開する。
 - ・2024年度の実習においても、この考え方の原則をもとに、看護を導き出すことができるように計画中である。
3. アクティブラーニングを用いて、双方向性に学修できるようにする。
4. 反転学修を用いて、学生が自ら答えを導き出す方法を獲得できるようにする。
5. 梯子外し理論を用い、学生の思考プロセスが徐々に確立できるようにする。

授業以外の諸活動(1年チューター長)においても、できる限り学生の主体的な行動を見守り、後押しできるよう「声掛けは最小にする」「学生の来室は大歓迎する」という信念で過ごしている。

また、学生に最新の知識と根拠を提供できるよう、自分の専門学会・専門関連学会(日

本救急看護学会副代表理事、日本クリティカルケア看護学会理事、日本臨床救急医学会理事、日本看護研究学会評議員、日本看護学教育評価機構評価委員等)には積極的に参加し、知見を広げている。

4. 学習成果

担当した科目の授業評価アンケートのうち、回答率が 60%以上あり、ある程度信憑性が確保できるものを用いて教育活動の評価を行う(成人看護学実習 I【資料4】・成人看護学実習 II【資料5】・成人看護方法論 II・成人看護方法論 III)

- 1) 学生からの授業評価では、特に成人看護学実習 I と II において、実習に対する取り組み、実習の成果、実習内容・方法、実習指導すべての項目において、回答者の約 90%が「そう思う 5 点」「ややそう思う 4 点」と評価しており、さらに実習全体を通して「有意義であった」とする者が 95~98%であった。
- 2) アンケートの回答率が 60%以下であった科目もあり、それ自体が問題であると認識する。

5. 改善のための努力

新カリ科目については、各科目の形成評価中でありそれらをもとにした改善を次年度に行う。

- ・授業評価アンケートの回答率をアップさせ、学生が自ら意見を述べ履修科目の発展に学生もかかわっていると意識させるような働きかけが必要。
- ・実習科目の学生の満足度は高いため、新カリ科目でもこれらを継続できるよう計画する。

6. 今後の目標

新カリキュラムにおいて、総合教育科目や専門基礎科目に位置付けられた科目も多数担当している。このことを自分の教育活動にどのように位置づけるか、また新カリキュラムではどのように考えるべきか検討する必要がある。

専門基礎科目の中でも、医師が教授すべき部分と、看護教員が担当すべき部分の根拠を明らかにして、時間数の調整等が必要になると考えている。

また、看護専門科目は、領域横断的に看護の基盤を育成するのが新カリキュラムの方針であるが、教員の中にはこれまでの経験から、講座制の考えが根強く残っている者もいる。新カリキュラムの方針が正しいか否かは、完成年次後の総括評価と卒業生による評価、そして卒業生の就職先からの評価を待つ必要がある。この準備を進める必要があると考える。

さらに、新カリ完成年次後には「看護教育評価機構」の分野別評価、および「大学機能評価」も受審する時期にもなる。この評価では、「内部質保証」が益々厳格になってくると考える。特に、アセスメントポリシーに則ったアセスメント評価指標とその評価実施体制、評価の結果によって変更を加えたことなどが具体的に問われると考える。そのため、自分

の科目の PDCA はもとより、課程レベル・機関レベルの評価を具体的に実施する体制整備が必要であると考える。

【添付資料】

【資料1】2022年～2023年度 担当科目一覧

【資料2】病態学Ⅱの1)～4)のレジюме

【資料3】成人看護学 講義内容 第1講～第3講

【資料4】成人看護学実習Ⅰ 授業評価アンケート

【資料5】成人看護学実習Ⅱ 授業評価アンケート

【資料1】 2022 年～2023 年度 担当科目一覧

【2022～2023 年度 担当科目】

	科目名	対象 学年	単 位 数	必修 / 選 択	開講年度
新カリ キュラム	看護基礎ゼミ	1	1	必修	22,23
	看護基盤実習Ⅰ	1	2	必修	22,23
	看護基盤実習Ⅱ	2	4	必修	23
	現代医療論	1	1	必修	22,23
	薬と毒性学入門	1	2	必修	22,23
	病態学Ⅱ	2	2	必修	23
	保健行政論	2	1	必修	23
	ヘルスアセスメント学Ⅰ	1	1	必修	22
	ヘルスアセスメント学Ⅱ	2	1	必修	23
	ナーシングスキル学Ⅰ	1	3	必修	22
	ナーシングスキル学Ⅱ	2	3	必修	23
	成人看護学	2	1	必修	23
	成人看護方法論Ⅰ	2	1	必修	23
	旧カリ キュラム	看護研究Ⅰ	3	1	必修
成人看護方法論Ⅰ		2	2	必修	22
成人看護方法論Ⅱ		3	2	必修	22,23
成人看護方法論Ⅲ		3	1	必修	22,23
成人看護学基盤実習		2	1	必修	22
成人看護学実習Ⅰ		3	2	必修	22,23
成人看護学実習Ⅱ		3	2	必修	22,23
統合実習		4	2	必修	22,23

救急・救命法 1)～4)の講義内容

生体侵襲理論の考え方に基づき、以下のショックの病態と治療を理解する

- 1) 循環血液量減少性ショックの病態と治療
(出血性ショック・熱傷)
- 2) 心原性ショックの病態と治療
(心筋梗塞・重症不整脈)
- 3) 血液分布異常性ショックの病態と治療
(敗血症・アナフィラキシー・神経原性)
- 4) 心外閉塞・拘束性ショックの病態と治療
(心タンポナーデ・肺塞栓症・緊張性気胸)

【資料3】成人看護学

講義内容（第1講～3講）

1. 侵襲と生体反応
 - ・生体侵襲理論
 - ・ストレス理論
2. Stress-Coping理論
3. 危機理論

【資料4】成人看護学実習 I 授業評価アンケート

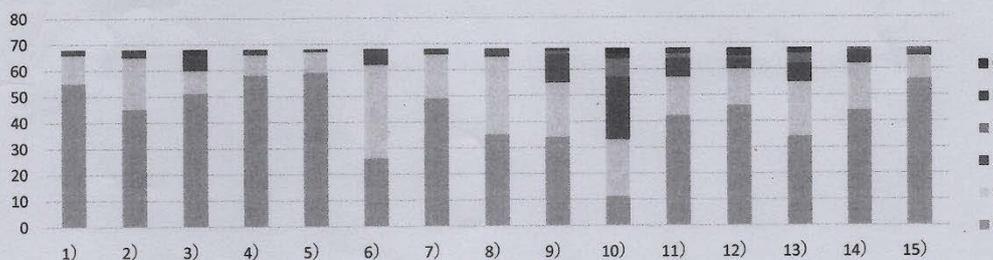
看護学科 臨地実習授業評価アンケート集計結果

科目名	成人看護学実習 I	履修者数	77人
学年	3年生	回収数	68人
		回収率	88.31%

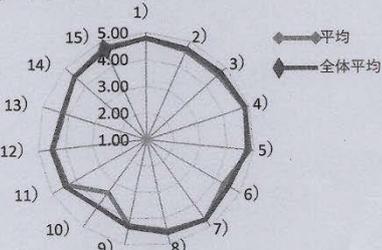
項目別回答分布(人数と平均値)

質問項目	全体平均	回答数(回答率)						有効回答
		5	4	3	2	1	0	
		5	4	3	2	1	0	
I. 実習に対する取り組み								
1) 実習に積極的に取り組んだ	4.78	55	11	2	0	0	0	68
2) 日々の学習を振り返りながら、それを活かして実習を展開できた	4.62	45	20	3	0	0	0	68
3) 体調管理に努めながら実習に取り組んだ	4.57	51	9	6	0	2	0	68
4) 実習マナー(挨拶や言葉使い)を守って実習に取り組んだ	4.82	58	8	2	0	0	0	68
5) グループ間(学生同士)で協力しあうことができた	4.85	59	8	1	0	0	0	68
II. 実習の成果								
6) 実習の目的・目標が達成できた	4.29	26	36	6	0	0	0	68
7) 実習によって自分自身の学習課題が明らかになった	4.69	49	17	2	0	0	0	68
III. 実習の内容・方法について								
8) 実習の目的・目標は明確であった(適切であった)	4.47	35	30	3	0	0	0	68
9) 事前オリエンテーションの内容は役にたった	4.26	34	21	11	1	1	0	68
10) 実習課題や記録物の量は適切であった	3.43	11	22	24	7	2	2	68
IV. 実習指導について								
11) 教員は学生の理解や反応をみながら指導していた	4.37	42	15	7	2	2	0	68
12) 実習指導者の助言は、実習目標の到達に活かせるものであった	4.46	46	14	4	1	3	0	68
13) 教員と実習指導者の連携がとれていた	4.19	34	21	7	4	2	0	68
14) 実習環境は十分整っていた	4.54	44	18	5	1	0	0	68
V. 実習全体を通して								
15) 今後の学習意欲につながる有意義な実習であった	4.76	56	9	2	1	0	0	68

回答分布



評価レダーチャート



自由記述なし

- ・実習中に担当教員が変わるのはどうかとおもいました。
- ・アセスメントや看護問題、看護計画の書き方について教員によって書き方が異なり、混乱した。看護過程の授業のときからグループごとに差が出るので、事前に教員間で書き方を統一して欲しい。
- ・教員によって看護課程のあらゆる様式書き方の説明が異なり、生徒としては混乱しが生まない。チーム医療を謳っているなら、教員間でくらしい連携して統一するくらいの努力はしてほしい。バカ高い学費払っています。今この1秒もお給料が出ていることを自覚してください。
- ・課題の量が多くて、眠れない。実習指導者との意見の違いがあつてやりづらかった。
- ・課題の量が多い。場所も違い、眠れない。
- ・先生よっての指導方法の違いについては改善して欲しい。

【資料5】成人看護学実習Ⅱ 授業評価アンケート

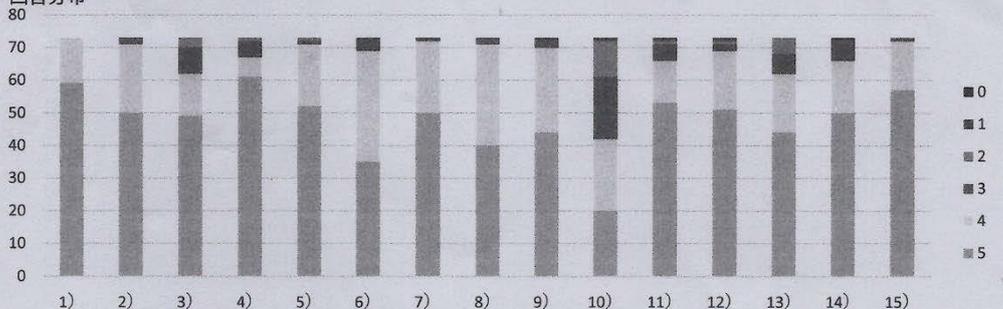
看護学科 臨地実習授業評価アンケート集計結果

科目名	成人看護学実習Ⅱ	履修者数	77人
学年	3年生	回収数	73人
		回収率	94.80%

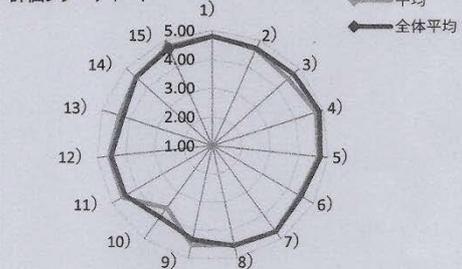
項目別回答分布(人数と平均値)

質問項目	全体平均	回答数(回答率)						有効回答
		5	4	3	2	1	0	
		5	4	3	2	1	0	
I. 実習に対する取り組み								
1) 実習に積極的に取り組んだ	4.81	59	14	0	0	0	0	73
2) 日々の学習を振り返りながら、それを活かして実習を展開できた	4.66	50	21	2	0	0	0	73
3) 体調管理に努めながら実習に取り組んだ	4.48	49	13	8	3	0	0	73
4) 実習マナー(挨拶や言葉使い)を守って実習に取り組んだ	4.74	61	6	5	1	0	0	73
5) グループ間(学生同士)で協力しあうことができた	4.67	52	19	1	1	0	0	73
II. 実習の成果								
6) 実習の目的・目標が達成できた	4.42	35	34	4	0	0	0	73
7) 実習によって自分自身の学習課題が明らかになった	4.67	50	22	1	0	0	0	73
III. 実習の内容・方法について								
8) 実習の目的・目標は明確であった(適切であった)	4.52	40	31	2	0	0	0	73
9) 事前オリエンテーションの内容は役にたった	4.53	44	26	2	0	1	0	73
10) 実習課題や記録物の量は適切であった	3.67	20	22	19	11	1	0	73
IV. 実習指導について								
11) 教員は学生の理解や反応をみながら指導していた	4.59	53	13	5	1	1	0	73
12) 実習指導者の助言は、実習目標の到達に活かせるものであった	4.60	51	18	2	1	1	0	73
13) 教員と実習指導者の連携がとれていた	4.38	44	18	6	5	0	0	73
14) 実習環境は十分整っていた	4.56	50	16	6	0	1	0	73
V. 実習全体を通して								
15) 今後の学習意欲につながる有意義な実習であった	4.77	57	15	1	0	0	0	73

回答分布



評価レダーチャート



自由記述

・先生、指導者さん共的的確なご指導を丁寧にして下さったので、とても安心して初めての実習を行うことができました。ありがとうございました。
 ・汐見台の担当の先生方がみんな相談に乗ってくれて、とても助かりました。ありがとうございます。
 ・ケアの重要性がこの実習で学べたので、ケアの演習をもっと増やしていくべき。
 ・課題の量が多すぎて、眠れない日が多い。